Inventar : Bibliothek
Nr. 19891/467

古代ラテン語集成案内

目　次

頁

I. 編纂研究所組織 …… 2

A. 本辞典編纂の歴史 …… 2

B. 編纂研究所構成員 …… 5

C. カード資料室と図書館 …… 5

II. 本辞典の解説 …… 6

A. 語彙資料 …… 6

B. 語彙分類の方法と記述 …… 7

1. 見出し語の構成 …… 8
2. 序　部 …… 9
3. 主　部 …… 10
   a. 語意の提示 …… 10
   b. 語史の解説 …… 11
      α. 用例の分類と配列 …… 11
         (I) 分類項目の対置配列 …… 12
         (II) 意味内容に基づく分類基準 …… 13
         (III) 用例の年代順記載 …… 14
      β. 用例選択の基準 …… 15
4. 補追事項 …… 16

C. 略号ならびに表記法 …… 17

1. 論述項目の順位に関するもの …… 17
2. 用例省略の明示に関するもの …… 18
3. 用例引用と説明に関するもの …… 18
4. 省略記法 …… 19

あとがき …… 25

THESAURUS
LINGUAE
LATINAE

I. 編纂研究所組織

A. 本辞典編纂の歴史

ルネサンス期いらい，古代から伝承された全資料をもとにラテン語語彙をもれなく集成し，その全てを記載した辞書の出現を切望した人間は数多くおり，そのためこの要請に応えることのできるような辞書編纂の大業を試みた個々の文献学者も跡を断たず，R. Stephanus, A. Forcellini, I. I. G. Scheller, R. Klotz らがその名を留めている[1]。しかしながら，個々人の力量をもってしては，この大業のとうてい成りがたいことがやがて明白となるに及んで，19世紀の学者たちは，複数研究者の協力のもとに全ラテン語文献を網羅した資料による集大成（Thesaurus totius Latinitatis）の編纂に思いを抱いたのであるが，その計画の進展は見られなかった[2]。

（1） これについての詳細な記述は，F. Heerdegen, 'Lateinische Lexikographie', (Stolz-Schmalz, *Lateinische Grammatik, Handbuch der Altertumswissenschaft II 2*, München [4]1910, 693 sqq. 所収)

（2） ここに始り以下に続く一連の事情については，Heerdegen, op. cit, 並びに *Thesaurus* 第1巻の緒言が最も詳細である。加えて，A. Szantyr (Hofmann-Szantyr, *Lateinische Syntax und Stylistik, Handbuch der Altertumswissenschaft II 2, 2* München 1965 (1972 再版) の補章 p. 74sq. 所収)；W. Ehlers, Der Thesaurus Linguae Latinae. Prinzipien und Erfahrungen (*Antike und Abendland* 14, 1968, 172sq. 所収)；G. Polara, Il Thesaurus Linguae Latinae (A. Garzya-M. Gigante-G. Polara, *Omaggio a B. G. Teubner*, Napoli 1983, 77–111 所収) を参照.

しかし，やがて遂に古代ラテン語集成の編纂事業が開始の日を迎えることとなったのであるが，それはエドワルト・ヴェルフリン（Eduard Wölfflin）の献身的努力に負うものである。彼は，'*Archiv für lateinische Lexikographie und Grammatik, ... als Vorarbeit zu einem Thesaurus Linguae Latinae*' と題する年刊誌を創設し，1884年創刊以来その誌上には[3]，将来の「集成」の論述構成の手本となるべき，多くの論攷が掲載された。さらにこの企画遂行のために数多くの専門学者が協力態勢を編成するや，ヴェルフリンは，基本資料の集大成と辞典項目の記述にむけての準備作業として，協力者たちにラテン語原典を配分し，綿密な検討を行わしめたのである。

1893年テオドル・モムゼン Theodor Mommsen の提案に基づき，ベルリン，ゲッティンゲン，ライプチッヒ，ミュンヒェン，ウィーンの五つの人文系学士院は，ラテン語語彙辞典の編纂刊行事業を決定した。五学士院間に交された合意に基づき，この辞典の基礎資料となるべきものとして，(i) 現存するラテン語資料のうち原作が西暦150年頃以前の時代に属するものは

全て，もれなくカードに記載整理されること。(ii) また原作がそれ以後であっても西暦600年頃以前の時代に属するものであれば，各々の分野の専門家の手を煩わせて，広範囲にわたる抜粋カードが作成されること，となった[4]。こうして1894年，ゲッティンゲンの F. レオ (F. Leo) とミュンヒェンの E. ヴェルフリンの監修の下に着手された作業は，まさに幸先のよい進捗を示し，1899年ミュンヒェンにおいては——その間にすべてのカード資料はミュンヒェンに集積整理されていたわけであるが——，語彙についての最初の記述原稿が執筆されうる段階にたっしていた[5]。つづいて翌1900年からは，ライプチッヒの出版社 B. G. トイブナーから，それより3年以前に結ばれた契約に従って，本辞典が発刊されるはこびとなった。

（3） *Thesaurus* の第1分冊の刊行後，この年刊誌の副題は，'*als Ergänzung zu dem Thesaurus Linguae Latinae*' に改められて，1908年まで継続刊行されている。

（4） 基本資料の集成についてなお詳しくは，本稿 II A の項参照。

（5） この時点から後は，編纂主筆 (redaktor generalis) が，実務責任者となっている。初代 F. フォルマー (Friedrich Vollmer) に続いて E. ロンマッチュ (E. Lommatzsch) 1905–1912, G. ディットマン (G. Dittmann) 1912–1936, B. レーム (B. Rehm) 1936–1942, H. ルーベンバウアー (H. Rubenbauer) 主筆代行 1942–1947, H. ハフター (H. Haffter) 1947–1952, W. エーラース (W. Ehlers) 1952–1974, 1974以降，今日まで P. フルーリ (P. Flury) がその職にある。

基礎材料の集成が所期の5年間のうちに順調に完了されたところから，古代ラテン語集成の記述編成の作業そのものも，おそらく15年間のうちには完結するであろう，というのが当初の予測であった。しかしながら，第1巻第1分冊刊行いらい12年経過し，その間には事業促進のために懸命の努力が傾けられたにもかかわらず，完成したのは最初の4巻のみにすぎず[6]，そのために完成期日を1930年まで延期せざるをえなくなった。釈明の口上としては，事業そのものが前例のない規模を有するものであるために，その完了までに必要な期間を前以って設定するに適切な規範がなかったことが挙げられた。

（6） 今日迄に刊行されている部分は以下の通りである（1901年いらい各折り一刷り上りの16頁一の第1ページには，その部分が印刷承認をうけた年月日が記録されている）：

vol.	I	A-Amazon	1900(– 1905)	vol.	VI 3	H	1936 – 1942
	II	an-Byzeres	1900 – 1906		VII 1	I-intervulsus	1934 – 1964
	III	C-comus	1907(– 1912)		VII 2	intestabilis-lyxipyretos	1956 – 1979
	IV	con-cyulus	1906 – 1909		VIII M		1936 – 1966
	V 1	D	1909 – 1934		IX 2	O	1968 – 1981
	V 2	E	1931 – 1953	*Onomastici*	vol. II	C	1907 – 1913
	VI 1	F	1912 – 1926		III	D	1914 – 1923
	VI 2	G	1925 – 1934				

Onomasticon（固有名詞辞典）の刊行中断については，本稿 II A 参照。vol. IX 1 N の刊行は，所収予定の語彙が厖大な量にのぼり，刊行計画に遅滞を招く惧れがあるために，他の諸巻の順序からは外されている。

だが事実，最初設定された期日はもとより，延期された期限がきたときにも，「集成」は完成には至らなかった。主要な原因を挙げるならば，先ず第一には，今世紀に生起した世情の激動が，*Thesaurus* にも激しく襲いかかり，その進捗を甚だしく困難ならしめたこと，そしてまた他方では，今回の辞典編纂の基本条件そのものに由来するところもあって，最初の基礎資料の集成から時日が経過していくに従って，最初の原則を墨守してカード化された資料のみを基として論述を仕上げる，ということが，次第に困難になってきたのである。そのために，見出し語が含まれている全ての引用個所は，主要校訂諸本との照合のうえで，その文脈が吟味され，また解釈に際して適切な意味を示す何らかの補助的研究があれば，これも重視する，という方針がつとに踏襲されることとなった。それらの理由に加えて，古典文献学をはじめ古代研究の諸学の発展にともない，「集成」がみたすべき要請は日々増加の一途を辿り，その結果，一例を挙げるならば，後期ラテン語文献，とりわけキリスト教教父たちの残した文献については，抜粋文の補足追加の面でも，語彙の論述構成においても，より一層に慎重な配慮が求められることとなった。そして最後に最も重要な点を挙げるならば，編纂協力者たちが語彙の探索や分類記述の経験をつうじて身につけることとなった方法論と識別眼は，次第に微妙な色分けを識別することとなり，やがては最初の方針から大きく離れていくことにもなった。以上に挙げたような諸点はいずれも今回の編纂事業としては無視できない重要性をもっていた。なぜならば，古代研究，言語研究，そして今回の「集成」編纂は，三者相互の影響関係のもとに始められたものであり，今日までその歩みを刻んでいるからである。

さらにまた，辞典掲載の諸論攷に随伴するべき附加的小論，説明論文，副次的記述の類を公刊する目的のもとに，'*Beiträge aus der Thesaurus-Arbeit*' と題された一連の小論文が，1934年いらい *Philologus* 誌上に連載されるはこびとなったが，その後1952年以降は，*Museum Helveticum* 誌がこれを引き継いでいる[7]。

（7） 1976年に至るまで，この連載形式によって刊行された小論文を一巻にまとめて再刊したものが，'*Beiträge aus der Thesaurus-Arbeit. Herausgegeben vom Thesaurus Linguae Latinae, Mit einem Vorwort von Heinz Haffter*, Leiden 1979. である。

ともあれ，ドイツとオーストリアの諸学士院の協力によって創始された我々の編纂事業が，第一次世界大戦直後の世情混乱のために存亡の危機に見舞われたとき，これに対して四方から，また諸外国からも，多大の援助の手が差しのべられたお陰で，中断を免れることができた[8]。事実また第二次大戦後も，「集成」編纂を継続することができたのは，ドイツ並びに外国のアカデミーや学術会議の代表者の構成する国際 *Thesaurus* 委員会の恩恵によるものであり，1949年以降の「集成」の刊行は，この組織の責任において進められてきている[9]。

（8） 援助者諸氏の芳名欄の一例は，第6巻の冒頭に掲げられている。
（9） 編纂者並びに援助者の芳名欄は，各分冊もしくは各巻の序に掲げられている。

B. 編纂研究所構成員

編纂作業は，約20名の研究所員の分担によって進められる。編纂主筆，各巻の編輯責任者，項目論述の執筆者たちである。この研究者集団には，当初より常時ドイツ及びオーストリアからの文献学者が参加してきているが，1920年以後はその他の諸国からも参加を得ることとなり，とりわけ新たに国際的委員会が設立されてから後は，国際色が著しくなっている。

他方また必要経費の大部分は西ドイツ連邦，とくにバイエルン州によって賄われている。しかし編輯者会議に代表派遣を行なっている諸国の学士院，学術会議なども，「集成」編纂の年次経費に対して経済的援助を醵出したり，また，執筆者たちの研究集団に，二年もしくは三年間にわたって参加すべき協力者を，自国の給費生として派遣している。

外部からも編纂作業に協力を惜しまない助言者たちが数多くいる。ある種の語の語源について，またある種の語彙の，いわゆるロマンス系言語における保持状態などについては，これらの分野の専門家たちが執筆している。さらに校正段階においては，数多い外国の学識者たちがその都度惜しみない助力を提供し，各人各々の専門分野との関わりにおいて特に細心の注意を傾けながら，個々の語の論述を吟味し，訂正，補筆，あるいは極めて有益な意見を寄与することとなっている[10]。

(10) 各巻の編纂に助力を賜った助言者諸氏の芳名は，各巻の序言に記されている。また第1巻いらいの慣行として，各項目の論述末尾もしくは，一連の論述の末尾には，各々の執筆者の名が挙げられてきたが，第5巻以降はさらに各頁の下欄にも記されることとなった。編輯責任者たちの名は，各折り（刷り上りの16頁）の第1ページに略号によって示されている。

C. カード資料室と図書館

Θησαυρὸς Thesauri（'宝物殿中の宝物殿' の意）と呼ばれて然るべき資料室は，現在約10,000,000枚のカードを収蔵し，これによって西暦600年までのラテン語文献に現れる語彙を網羅している。これらのカードは，見出し語のアルファベット順によって分類され，また各見出し語ごとにまとめられたカードは，記載文献の年代順に整理されていて，通覧すれば見出し語が現れている文脈を確認できる仕組みとなっている。ただし，抜粋文献の場合には見出し語の引用個所の章節のみが記されている例も多いし，引用文献が後期に属する場合に散見されるように，用語索引もしくは原作者のコンコーダンスが挙げられていることもある。だが，カード資料そのもののなかには，個々の文脈における語彙の意味，文法的構文，文体的特色などを指示するような予備的情報は一切ふくまれていない。それらの問題を究明することこそが，まさしく各語彙の論述執筆者たちの仕事なのである。

カード資料室と並んで，編纂作業の方針に全面的に添うように整えられた図書館があり，外部からの研究者たちの便にも供されていることを附記しておきたい。

II. 本辞典の解説

A. 語彙資料

語彙の記述の，基礎となる材料は，カード資料室に収められているが，これは最古期に始まりアントーニーヌス王朝期に至るまでの間に記されたラテン語諸文献のうち，今日なお伝承されている原典の全てを網羅し，それらに基づく文例の全てを記録したものである。その時期以降から西暦600年頃に至る時代の文献のうち幾種類かのものは，編纂作業の当初から，また別の幾つかはその後になってから，全体資料の中に編入されるはこびとなった[1]。

しかしながら，後期の時代に属する他の一切の原資料からは，抜粋とはいえ広範囲にわたる集成がすでに終っており，さらに従来は顧慮されることの無かった原典もしくは新しく発見された原典，とりわけ碑文資料に関しては，既存の抜粋資料を精査すると共に新規の抜粋製作によって完備を期する努力を怠っていない。またそれとは別個に，第1巻が1900年に刊行されたのち，学会研究諸誌をはじめあらゆる文献学的研究を渉猟精査して，新たな材料集成が始められており，これらは補追項目として今日もなお増加の一途をたどりつつある[2]。

（1） この時代に属する文献中，以下の作者らの作品，あるいは文献は，すべてカード資料に組み込まれている。フロント，ガーユス，アプレーユス，ローマ法大全（*Digesta*），ミヌーキウス・フェーリックス，テルトゥリアーヌス，キプリアーヌス，ローマ皇帝伝史家（*Scriptores Historiae Augustae*），アルノービウス，ユウェンクス，‘アエテーリア巡礼記’，（‘*Peregrinatio Aetheriae*’），アウィエーヌス，ヒェローニュムス‘書簡集1-65’，ラテン語聖書，プルーデーンティウス，聖アウグスティーヌス‘神国論’全巻，コンモディアーヌス，テオドーシウス法典，ユースティニアーヌス法典，ボエーティウス‘哲学の慰め’全巻，‘師の規則’（*Regula Magistri*），ならびに，‘ベネディクトゥスの規則’（*Regula Benedicti*）。碑文資料に関しては，カエサルの死に至るまでの時代の，ラテン語碑文総集（*CIL*）第1巻に含まれている限りの碑文全部と，帝政期に入ってからの重要な碑文はみな，カード資料に編入されている。それ以外の碑文，ならびにパピルス文書は，抜粋の形で，カード資料室に保存されているにすぎない。

（2） これについての詳細は，P. Flury, ‘Aus den Addenda des Thesaurusarchivs,’ *Museum Helveticum 41*, 1984, 42ff. によって報じられている。

年代が比較的に新しい基礎文献の場合には，語彙項目の論述にとって必要とされるだけの抜粋だけで処理し，これによって概ね全体が捕捉されうると定めたことは，語彙集成の編纂にとっては極めて適切な処置であった。という理由は，現在，とくにコンピュータなど機械的補助手段を用いれば，資料の厖大な山を築くこと，例えば，教会教父たちの全著述のカード資料を集成することなどは，比較的簡単にできるであろうが，しかしそのような莫大な山積から，語彙の意義を引きだすために何らかの役に立つような用例を選択するとなれば，けたはずれの時

間と労力の費消をともなうことになっただろう[3]。またもし，ある特定の語彙の全用例を徹底的に調査したいという場合には，昨今その数が日毎に増しているところの，作家別もしくは資料別の索引やコンコーダンスの類が，その必要に充分応えうるといっても過言ではあるまい。さらに，現在進行中の，全ラテン語文献をコンピュータによって網羅捕捉するデータバンクも，役立つことであろう。

他方，最初の計画によれば，固有名詞も *Thesaurus* の項目に編入されることと定められ，これに従って第1，第2巻では各々A，もしくはB，に始まる固有名詞が，普通名詞と共に項目化され，またCとDに始まる固有名詞は別巻 *Onomasticon*（固有名詞巻）として刊行されたのである。しかしその後，*Onomasticon* の継続刊行は，歴史学や家譜人名の研究にとっては有益であっても，文献学者にとってさほどに益する処はないという理由から，普通名詞の諸巻を一刻も早く完成させるために，中断された。ある語彙が，固有名詞として用いられているのか，普通名詞として用いられているのか，見分け難い場合には，個々の見出し語の事情に即して個別に判定が下される[4]。

（3） 基礎文献の量が，編輯能力を超えて辞典としての限界を侵すものとなることは，聖アウグスティーヌスただ一人の著作量からだけでも充分に明らかである。その全著述をカード資料化した場合には，資料室の収蔵枚数量は今の五割方増加する。

（4） *luna*, *musa*, *oceanus*, *ops* のような，それぞれの語彙によって神格が指示されるような場合があっても，その種の語彙の例文は普通名詞の扱いとなっている。だが，*levita* とか，*palatium* などの語彙が，*Onomasticon* 収録用語として遠ざけられているのは，いささか残念である。

さらにまたギリシア語系の語彙一般については，*ostracum* ὄστρακον のように，ラテン語形に同化されているものに限らず，これに加えてギリシア語形と同一の形で現れるもの，例えば *ostracoderma* ὀστρακόδερμα のごときものも収録されることとなっているが，ただし，字体そのものや文脈から判断して，ギリシア語語彙として引用されているものは，含まれていない。しかしながら，ラテン語原典の歴代校訂者たちは，ギリシア語語彙の綴りや字体の扱いについて，各人各様であるために，綴字体が写本伝承によって保持されている様態を確認することが困難である場合が少なくない。本辞典の編纂においてもこの点についての一貫性を維持することはできていないし，また，ギリシア語起源の基礎資料の場合，統一的方法と処理によって，カード資料に編入されているとはとうてい言い難い[5]。

（5） そのために，基本資料には，キケロの著作に含まれている幾つかのギリシア語由来の語彙，例えば *epagoge* などが，欠落していた時期もあった。

B. 語彙分類の方法と記述

どのような語彙であっても，固有の性質を持ち，固有の歴史を持つものである。従って，それを記述するに際して基準となるような，普遍的規則というものは，とうてい存在しえない。

しかしながら，我々の編纂作業の経験をつうじて，幾つかの方法もしくは慣行が有効であることが明らかとなったので，以下にその中の主要なものを簡潔に記す。

本辞典と類似の他の諸辞典，例えばグリム兄弟の編纂になるドイツ語辞典を見れば，編輯初期の段階では文例が，概ね比較的単純な配列に従って並べられていたものが，経験を重ねるに従って，徐々に以前よりも肌理こまかい解釈や分類配列が目立つ結果となる。それと同じような状況が，このラテン語「集成」においても生じている[6]。そのために，論述構成の上では極めて多様な形態の派生を見ることとなったが，これについては逐一この場で説明するのを控えることを，ご寛恕ねがいたい。

（6） その一例として，第2巻所載の *antecedo* の論述と，第10巻の *praecedo* の論述とを比較されたい。またこの問題についての詳細は，P. Flury, 'Der Thesaurus Linguae Latinae', *Eirene 24*, 1987, 8-15 に記されている。

次に，語彙の論述を構成することとなる主たる項目は以下の通りである。1）見出し語の構成，2）序部，3）主部，4）補追事項。

1. 見出し語の構成

見出し語の構成に際して，本書は，幾つかの特殊事情が介在する場合を除いては，一般慣用の綴りと読み方に従っている。次に，変化形を指定するために，語尾の諸形を略号を用いて附記しているが，しかし実際に用例が知られていない変化形の場合には，復原形をもってこれに替えることを原則とはしていない。

主見出し語項目内に，派生語として扱われる従見出し語は，アルファベット順の配列ではなく，その語源の語彙の直接後に置かれている。派生語がアルファベット順に従って置かれるべき場所には，替え見出しが挿入されていて照合できるようになっている。このような例は，例えば，本来は分詞であるものが，形容詞もしくは名詞として使用される時のように，語彙の占める一つの品詞が，他の品詞に替えられていると見做される場合に頻繁に生じている。同様に，形容詞から派生した副詞形も，形容詞である語彙に続く。他方，幾つかの，用例の定着した熟語表現は，例えば，*ius iurandum* が語彙 *ius* の下に，また *lucri facio* が語彙 *lucrum* の下に来るように，その熟語の主要要素を占める語彙の項目内で扱われる。

さらにまた，存否の疑わしい語彙もしくは正当性が否定された語彙は，各々の場合に応じて，語の前に疑問符もしくは文献学の十字印が付されたり，あるいはその見出し語が古代ラテン語文献の語彙から除外されるべきものならば，角括弧によってくくられている。

見出し語の前上に附されている ^{x} の記号は，その語彙を記載した全部の基礎資料の中で，幾つかの例文が語彙論述の対象外になっていることを示す。下記 15，18 ページ参照。

最後に，語彙の読み方については，見出し語が含む長母音の上に横線記号を附してこれを示

す。なお，後期の語彙の場合，音節の長短の差を測ることは困難となるのであるが，一貫性を保持するために，同じ記号によって長音を示している。これは，語源上の考慮に基づいて附記したものである。他方，動詞の現在・1人称単数形語尾の *o*，ならびに *-io* に終る名詞の主格単数形の *o* の場合は，長音記号による指示は行なわない。これらの場合の *o* の縮音化は，かなり早期から一般化していたからである。

2. 序 部

見出し語の構成に続く序部においては，その語彙に関して古代の著述家や，現代の文献学者たち，また項目執筆者自身が提供する一般的な知見がとりまとめて記されている。それらの事項を語彙の歴史や変遷の記述とは別個に扱い，主部に先立って概ね以下の順序で提示することとなっている。

語源について，本辞典の記載のために印欧語系諸言語の専門家の執筆した部分は，角括弧でくくり，最後に執筆者名を略号で記す。複合語などの場合は，項目執筆者自身による語源解説が記載されている。

語彙の起源について，古代人が推測により記述している事柄は，現代人の判断に顧慮することなく，紹介されている。

綴字法については，見出し語の形と不一致のものがある場合に，碑文，パピルス文献，西暦7世紀以前の古写本を慎重に検討した上で，その旨を記す。

'notatur' と語彙の頭に記してあるのは，西暦600年以前の資料（碑文，貨幣，パピルス文献を主とする）において，語幹が省略記号で記されている際の様態を示している。しかし変化形の語尾省略の形は，記載しないことを常とする。

'NOT. Tir.' (Notae Tironianae)（Tiro 式略記号）は，特殊な場合を除き，主要校訂本における頁・章節を指示している。

文法的性について，またその転化について，注目に値するとされてきたものは，これについての古代人の証言を附して，提示する。

語形については，慣用的な形から距っているものを重点的に列記し，古代人が残している証言を添記する。

音節の長短（prosodia）については，とくに注目に値するものとして，古代人が言及している諸例，ならびに現代の学者や項目執筆者自身が特筆に値すると見做した諸例が，記されている。

語意について，古代人の伝える語釈を紹介し，難解語解説（glossae）は，この項の最後に置く。しかしながらこれらの事項は，主部の個別文例もしくは個別の項目の中に，古代人の証言として附記されている場合もすくなくない。

'legitur inde a' という表示は，当該の語彙の数世紀間にわたる使用頻度の概略が記述される時，用いられる。その際，語彙の実状に即して，単数形と複数形の別や，詩文か散文かの別まで，分離して扱わねばならないこともある。また場合によっては，同意語との比較を簡単な指示や語彙頻度表で示したこともある。

ロマンス語系諸言語の世界まで，もし語彙が連続的使用によって生き長らえることがあった場合には，その分野の専門家がその点について解説を施す。その部分は角括弧でかこみ，その学者の名を省略記号によって附記する。（ロマンス語系諸語を表す略号表は下記 21 ページ参照）。

原典批判に関わる附記は，やはり角括弧でかこまれているが，ここには，見出し語と発音，綴字法，語意などが近似しているために，写本文面上で，頻繁に混同されるような単語や見出し語を置き，又，文脈の字句が誤伝されているために，主部の論述に編入できないような例文，また，注目に値する原文修復の試案，などをとりまとめてある。

3. 主　部

a. 語意の提示

近年の「集成」編輯の慣行によって，論述の主部の冒頭に，概括的な語意を掲げることになっているが，そのような提示ができない場合には，論述内の小項目ごとに個別の解釈を記する。語意の提示は，概ね同一の意味を伝える語句表現をもって行ない，その前には，*i(dem)*. *q(uod)*. の記号を附する。慣行としては，見出し語をラテン語以外の言語に翻訳することはないが[7]，場合によってはギリシア語を用いている。例えば，下記に言及されている語 *lux* の文例において，ラテン語による語意の提示と並んで，ギリシア語が示されている如きである。従って大多数の場合は，同意語を用いたり，さらに頻繁には，パラフレーズを用いる必要が生じるが，その際には最大限，語源上の考慮を払いながら，語彙が有する本来的かつ中心的な内容を記述することを努力目標としている。このような記述によって，本辞典が提供したいと希い，かつ提供できるものは，語意を理解するための，いわば最初の取っ掛り以外のなにものでもない。個別の文例を精査検討することによって，やがては語彙の全般的用法のすべてを看取する能力が生ずるものであるし，また，全用例の考察に基づいてはじめて，個別の文例を正確に理解することができるからである。

（7） W. Ehlers, loco cit. p. 177sq. 参照。

語釈の記述に続いて（括弧でくくられている場合もあり，あるいは第一小項目に先んじて前置きの位置にある場合もあるが），さらに語意解釈に関わる事項，とくに synonyma, opposita, iuxtaposita（これらについては，下記を参照されたい），また，古代より伝わる定義や，類似語間の意味上の差異の指摘などが，ここに記されている。

b. 語史の解説

α. 用例の分類と配列

主部においては，各語の歴史と用法の概要が理解されやすいように，小項目に標題を附し，配列原則を明示した符号を記し，すべての基本資料をこれに従って分類し提示することが，「集成」の慣行となっている。このような分類配列と語意解釈によって，本辞典が明らかにしている見解については，どうか読者自身が検討を加えられ，自身の批判的能力によって判定を下されるよう，お願い致したい。大規模な配列構成をもつ項目の一例として，単語 *lux* の論述構成を以下に紹介する（vol. 7, 2, Sp. 1905, 56sqq. 参照）。

i. q.（単語 lux '光' の語釈）claritas lucendo effecta（'光を発することによって作りだされる明るさ'）

caput prius（第1大項目）: proprie（本来の属性に従って）

I. generatim（種類別）

A. -x caelestis（天空に現れる輝き）

1. diei, solis（日の，太陽の）
2. signorum nocturnorum（夜空の星辰の）
3. fulminis（雷光の）
4. arcus caelestis（虹の）
5. nimbi diuini（神的な雷雨の）

B. -x non caelestis（天空のものではない輝き）

1. strictius pertinet ad ignem（比較的厳密に火焔に関わるもの）
2. latius vel hyperbolice（比較的広義に，もしくは誇張をふくんでいるもの）

II. speciatim de virtute oculorum（特に，眼の優れていることに関して）

A. per se（lux だけで用いられている場合）

B. cum determinatione（他の語，例えば oculorum の並用によって，その意味が限定されている場合）

caput alterum（第2大項目）: in imagine et translate（比喩として，又，本来の光とは異なるものを指している場合）

I. usu profano et communi（世俗的かつ一般共通の用法）

A. praevalente respectu decoris, praeclaritatis sim.（主として風姿物腰の優雅なるさま，光彩陸離たるさま，など）

1. metonymice de hominibus（人間の属性を現わす転喩 metonymy として）
2. de ipsa praestantia（卓越性そのものを現わすものとして）

B. praevalente respectu intellegentiae salutaris, revelationis, explanationis sim.（主

として有益なる洞察力，発明発見，説明解釈などの優れたることを指すもの）

II. usu Iudaeorum et Christianorum proprio（ユダヤ教徒およびキリスト教徒に固有の用法）

A. generatim（種類別）

B. metonymice（転喩 metonymy として）

C. peculiaria（特殊用法）

さて次に本辞典の慣行としてきたところの，見出し語の用例の分類と配列の方法について，簡単に説明を加えたい。

(I) 分類項目の対置配列

初期の編輯方針では，個々の分類項目を連続的に並置して一連の論述を構成するのが常であったが，これを改めて，項目の対置配列の努力がなされるようになってから既に久しい。対置配列というのは，相互に背反的な根拠で色分けできる二つあるいはそれ以上の数のグループ，例えば I と II，あるいは A と B と C のような分類を設け，それらを等位の分類項目と定める方法である。これによれば，例えば，単語 *lux* の転喩的 metonymicus 用例として人間が *mea lux*（私の光明）と呼ばれている場合，この文例は *caput prius*: *proprie* の分類項目の下にはなく，*caput alterum*: *in imagine et translate* すなわち，小項目 I A 1 Sp. 1915, 8 sqq. に見出されることとなる。

それ故に，もし読者がある特定の出典なり，意味なり用例なりを見付けたい時には，先ず第一に分類配列の仕組を理解することが大切であり，また部分と部分とが互いに対応している有様を比較検討してみなくてはならない。という訳は，分類項目の標題は，それだけからは明瞭な意味を汲むことは不可能であるけれども，それと対置配列されている標題と比べてみればたちまち明らかになる[8]。一例として再び語彙 *lux* の論述構成に眼をむけよう。*caput prius* の下にある小分類 I. *generatim* は，同じく II. *speciatim de virtute oculorum* の下に集められた用例以外の，すべての usus proprius を含んでいる。同様に *caput alterum*（第2大項目）においては，II A *generatim* の下に，同 B の下の転喩表現と同 C の特殊表現以外の，ユダヤ教徒とキリスト教徒の言語用例がまとめて掲げられている。

（8） 文法上ならびに修辞法上の概念の呼称もしくは術語は，伝統的に文献学者が今日まで用いてきたもの，例えば，Leumann, Hoffmann, Szantyr の *Lateinische Grammatik* (*Handbuch der Altertumswissenschaft*) の用いているもの，を本辞典でも踏襲している。

しかし実際には，用例の箇所を，厳密な定義によって定められた小項目に組み込むことができない場合もあり，そのような時には，意味の主たる相（*respectus praevalens*）を優先させて分類する。例えば，語彙 *lux* の第2大項目の I A 及び I B において‘主として’とあるのは

その含みである。また同じ語を扱った論述の Sp. 1910, 10., 1911, 52., 1916, 13 の注意書きにも見られるように，分類の適否が確実ではない用例は，その旨が項目標題に附記されている。このような実例に屢々出会うということからも明らかなように，小項目の厳密な対置配列は，分類配列上ある程度の有用性が認められる一つの方法にすぎない。与えられた一つの語の運命を，その語に合った分類と配列に従って記述することが，本辞典の課題であって，いたずらに外部から持ち込んだ枠組みに言葉を隷属せしめることが目的ではない。

(II) 意味内容に基づく分類基準

基本資料を分類の順位に従い，項目別に仕分ける際の基準となるのは，各語の意味内容と使用実例であるが，これらは，基本資料自体が有する性質，つまり各語各様に異なる条件に従って，定められる。

それ故に分類に際しては語義上の区別がしばしば最も重要視される。例えば，単語 *lux* においては，大項目として対置されている二つの分類は，*caput prius*: *proprie* と *caput alterum*: *in imagine et translate* となっている。さらに第1大項目（*caput prius*）の下位には，I. *generatim* と II. *speciatim* の二つの項目が対置されており，さらにまた I B の下位には，1. *strictius* と 2. *latius* とが対置されている。しかしながら，見出し語が指示する事物そのものの固有の性質に基づく分類基準は，単語 *lux* を例とすれば，第1大項目の中でも下位の分類に現れる。I A に至って *caelestis*，同 B. *non caelestis* の区別が設けられているし，またさらに A の下位に 1. *diei* と 2. *signorum nocturnorum* の別が現れるのである。同じ原則により，形態論に基づく分類も下位を占める。例えば，Sp. 1906, 5 (I) ‘*locat. -i*’ と同欄，42 (II) ‘*abl. temp. -e*’ の区別や，Sp. 1911, 26 *α. plur.* と同欄 51 *β. sing* の区別の如きである。最後に，文体論的基準に基づく分類は，同じ見出しの中で，論述の最終部に補追 *appendicula* の形で加えられている。

統辞論に基づく分類は，単語 *lux* の場合には，例えば，第1大項目の下位小項目 II A *per se* と同 B の *cum determinatione* に現れるように，下位のレベルに甘んじているが，単語によっては，上位の分類基準とされることも稀ではない。例えば，構文変化を伴なう動詞，*obliviscor* とか *oppleo* の場合などが，ちょうどそれに当る。だが，統辞論に関わる事柄が，対置配列によって適切に説明できないときには，文法構造について別個に記述することが慣行となっている。*praeiudico* の場合のように，補追の形で然るべき位置に記述し，これを全体の配列の中に記号で明示することもある。この種の補追は，*ordino* のように主部そのものに先行する場合もあれば，また *orior* Sp. 999, 19 sqq. のように，主部の中の主要項目に先行しているものもある。

上述の，またそれらに類する他の，語彙分類の基準を識別することを進めていく一方，他方

では，それらの間の関連をけっして無視するようなことがあってはならない。例えば動詞の場合，語義と構文との相関関係が，特に明白に現れることが頻繁に見られる。目的語として，可動物を取るときもあれば，不動物を取るときもある動詞，例えば，*infundo alicui aliquid*（何かに何かを注ぎ込む）と *infundo aliquid aliqua re*（何かを何かで濡らす）の場合に，それが認められるし，あるいはまた，*ligo zonam*（帯を締める）と *ligo nodum*（結び目を結ぶ）のように，目的語が動作の影響をうける対格であったり，動作の結果生ずるものを現わす対格であったりする動詞の場合も同様である。さらにまた，*ludo*, *moveo*, *obsequor* などのように，他動的にも，自動的にも，用いられる動詞の場合，やはり語義と構文は不可分の関係にある。

次にまた，特殊な言語表現も，そこに当該の語が頻繁に見出される場合には，随所に別項が設けられ分類される。例えば，単語 *lux* の第2大項目（*caput alterum*）の I には世俗的，一般共通の用例（*usus profanus et communis*）がまとめられているのに対置して，その II にはユダヤ教徒キリスト教徒に固有の用例が集められている。このような分類基準が時おり極めて重要な意義を持つと思われるのは，法律・医学・建築など，人生諸般の問題や学芸に関わる語や，叙事詩・エレゲイア詩・弁論・書簡など様々の文芸様式において頻繁に現れる語彙の用例を然るべき配列に整理する際である。

最後に，自然物あるいはその他の事物の名称を論述する場合には，各々の物の本来の性質に基づく分題基準に従っている。例えば，当該の語によって指示された物が，自然の事物であれ人生諸般の事物であれ，それがどのようにして作られ，使われ，見出されるか，という問いが分類の基準となる。例を挙げれば，*oleum*, *ovum*, *panis* などがあり，他方ではまた *hasta* や *liber* などの日用品の類をあらわす語や，食用や薬餌に供せられる薬草類の名称も，この扱いに附されている。しかしながら，読者は本辞典から百科辞典的な記述を期待しないでもらいたい――もっともある程度はそれに類するものもないではないが（例えば，*panis* の項 Sp. 223, 3 sqq., 225, 44 sqq. 参照）――，何故ならば，本辞典においては，諸物の名称の場合にも，何よりも言語の研究が第一義とされているからである。なお別の理由を記するならば，多くの事物の場合，それを指示する語はただ一つに限られるということがない（例えば，*olea* と *oliva*, *oleum* と *olivum* のように），従ってそのような場合，ただ一つの語を扱う論述の中では，充分な解説を附することはとうてい不可能である。

(III) 用例の年代順記載

等位の分類レベルにおいて対置される項目は，旧来の慣行によれば，一定の方法論によって配列が定められることになっていた。例えば，*usus proprius* は *usus translatus* の前に，*usus corporeus* は *usus incorporeus* の前に来ることになっていた。だが，近年刊行の諸巻では，用例の年代順記載が多くなっている。その理由は単に，論述の対象たるべき語の用例が年代順に

配列されていれば，即ちその語の起源や発展のあとを辿れるから，というだけではない。年代順に記載しても歴史が明らかにならない場合には，その事象自体が，軽からぬ意味を伝えていることがある。

そこで，分類配列の第1位に置かれる小項目では，全部の基礎資料の中で現存する最古の文例が示している用法を提示するように，努力が傾けられている。例えば，単語 *lux* の場合，最も古い用例から，その意味は日や太陽の光を指すものであるという証拠が挙げられるのであるが，十二表法やその他の初期の法令文の中に発見された用法は，所格 *luci* の形で *die*（日中に），*interdiu*（日のある間に）という意味を表わしているところから，*lux* の論述の主部は，*locutiones adverbiales* の項 Sp. 1906, 5 に編み込まれたこの語形から書き始められている。

さらに一つの項目内においても，文例は出典の年代順に配列することが慣行となっている。但しこの配列順を中断する場合には，例えば単語 *lux* Sp. 1906, 73. SALL. hist. frg. III 96 C 4……(TAC. hist. 5, 22, 3). VERG. Aen. 10, 259, や，同 1906, 44-47 の，二つのキケロの用例の間にある初期の用例のように，括弧を附してその部分を示したり（この際の括弧の用法については下記参照），あるいは当該小項目の末尾に簡単な補遺項目を設けてそこに送りこむこともある。同様に，括弧内の用例も年代順の枠に従っているが，補遺部分や，緒言部分においては，アルファベット順の記載がまま行なわれている。

β. 用例選択の基準

カード資料室に収蔵されている全部の用例を提示することは，稀な語を扱う場合を除いては，不可能である。従って本辞典編纂の当初より，適切に選択された基礎資料の提示が方針とされており，第3巻以降は，見出し語の左肩に ^{x} の附号をつけて，編輯者の手元にあるすべての用例が示されているわけではないことを断ってある。しかしながら，記載から除外された文例は，年代順に他の文例カードと共に編成されており，これを検索したいという希望者の役に立つように，カード資料室に保管されている。

さて，資料をどのような選抜基準に従って取捨するべきか。その問いに対しては，各語彙毎にその性質に適った判断によって答えを見出さねばならない。すべてに先行して，出典の年代が，先ず着目される。そしてその結果，どの語彙の場合にも，用法あるいは語義の用例中，最も古い時代のものを先ず提示することが慣行となっている。そのあと，概ね一般的かつ定着している用法を，あまり数の多くない出典を挙げて説明することになるが，長大な論述の場合には特に例文の選択は限られる。その理由は，語の歴史を記述するためには，例文の数よりも，約8世紀間にわたってその語が辿った変化の痕跡が，遙かに役に立つからである。本辞典の主眼はその問題と，またそれと同じく，あらゆる種類の特殊用例の指摘にあるわけだから，項目

記述に用いられる用例出典の数と，現存用例の数とが，正比例するべき必然性は全くない，と言うことができる。

しかし最初に見出し語の前に ^{x} の記号が附されることになったとき，それはただ単に，全部の用例がその論述記事には含まれていないことを示すに過ぎなかったが，間もなく，資料引用が省略されている箇所があれば，その都度，ある一定の文言ないしは記号によって，その旨を明示することとなった。この慣行が生れてからすでに久しい。例えば，項目の標題に添えて *exempla selecta* と記したり，あるいは一連の用例記載の中途もしくは末尾に，*al.*, *saepe*, *passim* と記すこともある（これらの記号の詳細は，下記 C2 参照）。

又，次の事柄を読者は心に留めて頂きたい。アントーニーヌス王朝以後の原典資料については，カード資料室には，広範囲にわたるとは言え抜粋資料のみが収められているに過ぎない。またそれのみか，完全にカード資料化されている，それ以前の時代の基礎資料をもとにしても，その時代のラテン語がどのようなものであったかを徹底的に究めることは不可能である。何故ならば，古代人が話したり書いたりした言葉のうち，ほんの僅かのものが，原典伝承という名の選択を経て，今日われわれの時代まで伝わっているに過ぎないからである。従って，一つの語彙の肖像画は，本辞典の執筆者たちが，精根かたむけて，カード資料のすべてを幾度となく繰り，すべての文例を用いてその輪郭を辿ろうとしても，必然的に，それはスケッチであり，不充分かつ未完成のものとならざるをえない。本辞典の編纂によって，見出し語に関わる研究が最終点に至ることはありえないし，またそのようには考えられない。むしろ，これによって研究が始められ，その歩みが進められることを期したい。

4. 補追事項

統辞論，文体論に関わる記述をはじめ，その他，主部の分類配列の中に適切な場所が与えられることのなかった諸事項は，補追の中で記述されている。例えば，単語 *lux* の場合，論述の末尾の前に，文体論に関わる補遺が付記されている。事実，*synonyma*, *opposita*, *iuxtaposita* なども，最初の慣例では，論述の末尾にただ列記されるに留っていたが，今日では，読者の判断のための道標として，適宜，肌理こまかい分類配列を施し，また出典個所の指示だけは欠かさないことになっている。この種の記事は，括弧でくくられている場合もあるし，また *lucrum* や *opus* の項目のように，語義解釈の前置きとなっている場合もあり，さらに *locuples* のように，補遺の形で集められている場合，などもある。

最後に，従見出し語（上記1参照）が，その必要あるときには記載される。その後に，見出し語からの派生語ならびに複合語が列記され，各々 *deriv.* あるいは *compos.* の略号が添えられている。最末尾に *cf. Onom.* と略記されているのは，見出し語が固有名詞としての用例をも有するものであることを示している（上記 A 参照）。

C. 略号ならびに表記法

1. 論述項目の順位に関するもの（12ページ以下を参照）

I A I a α ① ⒷⒷ…　各項目とその分類配列を表示するために，左の如き略号を，次の順位に従って用いる：

I-II A-B 1-2 a-b α-β ①-Ⓑ，以下同じ。

caput. pars　若し論述が普通より長大なものとなるときには，更に上位の分類レベルを設け，これを *caput prius-caput alterum* とし，更に上位のものが必要であるときには，*pars prior-pars altera* とする。比較的短いものの場合には，最初の分類レベルが，1と2から始まることもある。

( ) ( )　一連の用例が列記されている中で，幾つかの文例を一まとめにして提示する時，使われることが多い。すなわち，

ある名詞と，ある特定の形容詞とか，またある動詞と，ある特定の目的語からなる連関的表現が幾度も引用される場合，反復される語は字間にヒラキのある印刷体で記され，括弧の内部では頭文字によって略記されたり，もしくは全部省略されることもある。例えば，単語 *lux*, Sp. 1906, 44. CIC. Sest. 83 -e p a l a m (off. 3. 93 -e p. in foro); ib. 69: BELL. Hisp. 42, 4 -e c l a r a……in medio foro (LIV. 23, 10, 7f. m., -e c., videntibus vobis……)

また，意味内容もしくは他の理由により，比較対照されるべき文例を記すとき，この場合，類似点が認められるべき理由は，引用文例の前に，イタリック書体で綴られ括弧の中にくくられている。例えば単語 *lux* Sp. 1906, 51, (*fere i.q. prima -e, mane, item*……). Ov. epist. 13, 102 sq. ars 1, 247……ib. 56: (*rogatur populus*) si *quis* nocte sive -e……faxit. *al.*

(…[…]…)　上記のごとき丸括弧部分の中に，さらにまた同様な主旨のもとに別の文例が編入されるとき，新規編入部は角括弧でくくられ，外側の丸括弧は太字活字で印刷されることが多い。例えば，単語 *lux* Sp. 1906, 51: (*fere i.q. prima luce, mane. item* [*exempla certiora*]: ……)

2. 用例省略の明示に関するもの（15ページ参照）

^{x}lūx　見出し語の左肩に附記されている ^{x} の記号は，資料室にカード記載されて保存されている文例の全てが，この項目に記載されているものではないことを示す。

al., *et saepe*, *et passim*　*al.* の略号や，*et saepe* もしくは *et passim* が，適宜使用されている語句は，その部分に何らかの省略が含まれていることを示す。その正確な意味は，一連の用例列記の中で，これらの略号や語句が使われる位置によって定められる：

a．複数の著者名列記の中に挿入されている時には，その直前に名前が上っている作者に限って，用例が省略されていることを示す。例えば，*lux* Sp. 1908, 58: SALL. Iug. 99, 1……VERG. Aen. 4, 586……9, 338……*al* CIRIS 349……

b．小項目の末尾，もしくは括弧でくくられた一連の用例列記の末尾において：

アープレーユス以前の時代に出典が属する文例の直後で使われている場合には，その出典の作者の用例が省略されている可能性を示し，かつ，それ以後の用例全部が提示されていないことを示している。例えば，*lux* Sp. 1908, 58-65: CIRIS 349……PROP. 4. 3, 32……Ov. met. 3, 149……15, 664……(…[.]…). *al.*

アープレーユス以降の文例の直後で使われているとき，西暦2世紀中葉以降の文例が選択取捨されたものであることを示す。すなわち，作品全体を基にした選択ではなく，資料室カードの基になっている抜粋文から選ばれたことを表わしている。例えば *lux* Sp. 1908, 79-84: TERT. anim, 53, 6……OPT. PORF. carm. 24, 3 (……)……PRVD. ham. 965……(……) GENNAD. dogm. 62……(SACR. Leon. 1155). *al.*

3. 用例引用と説明に関するもの

様々の種類の異なる活字は，以下の如き趣旨に従って用いられている。すなわち：

CIC.　大文字タテ活字は，見出し語が典拠とする作者名を表わす。

Verr. II 2, 156　慣用タテ活字は，見出し語が使用されている作品名と出典個所の巻，章，節，ならびに原典の文言すべてを表わす。

CIC. Verr. II 2, 156　イタリック活字とギリシア文字活字は，項目執筆者自身が，注釈もしくは説明の目的で記した部分，たとえば項目の表題や，説明的文言を表わし，かつまた，見出し語を含まない引用文例や，西暦600年以降の用例や，ギリシア語文例を表わす。

. . .　文例の文言の間に打たれている三つの点は，文脈の一部省略を表わす。

引用された原典本文中の括弧の種類と用法は以下の通りである。

〈 〉　槍括弧は，補修部分を示す。例えば，*lux* Sp. 1906, 10: INSCR. column. rostr. (CIL I² 25) 3 l〈uci palam〉

( )　丸括弧は，碑文中の省略表記を可能な限り読解，追加した部分を示す。例えば，*ludus* Sp. 1784, 15: FAST. ann. Iul. Vatic. April 12 (CIL I² p. 242) Cerial(es)

[ ]　角括弧は，除去されるべき部分を示す。例えば，*lux* Sp. 1906, 18: VARRO. ling. 9, 60 qui -i natus Luci[li]us（この用法以外のものについては，上記の説明項目1を参照）

⌊ ⌋　鉤括弧が下方から指示している語句については，その直後に続く括弧内の注記が説明していることを示す。例えば，*lux* Sp. 1906, 37: ⌊pro -e⌋ ponentes (*sic cod. Chig. addens pro sole quae uerba ceteri sola praebent*; ……)

見出し語の構成においては，さらに以下の記号が使用されている。

?ōceanicus　語頭の疑問符は，実在性の疑わしい語であることを示す。

† optu　文献学上の十字印は，伝承過程において誤写誤伝された部分を示す。

[ōcitās]　角括弧は，本辞典の記載から除去されている部分を示す。

(octagōnos)　丸括弧は，修補された語形を示す。

（これらについては上記 II B 1 参照；^{x} 記号については上記説明項目2を参照）

4. 省略記法

-x, *-es*　見出し語には，容易に判読できる程度に簡略化された語尾が附されている。例えば *lux* の単数諸形は，*-x*, *-is*, *-i*, *-em*, *-e*, 複数形は *-es*, *-um*, *-bus*.

Housman ad l.　ある原典個所の解明のために引用されている近世現代の文献学者たちの注釈書や，最も基本的一般的研究は，ほとんどの場合，著者名だけが挙げられている。例えば，*lux* の場合，Sp. 1912, 37 には，MANIL. 1, 187……(‘*phases*’ *Pingraeus*, *sed v. Hovsman ad l.*)

Hofmann Szantyr とあり，同 Sp. 1905, 33 では，*Hofmann-Szantyr* という名前だけで，以下の表題の書物に言及している：J. B. Hofmann, *Lateinische Syntax und Stilistik, Neubearbeitet von A. Szantyr*, München 1965 (verbesserte Auflage 1972).

Leumann, Gramm. 1977 その他の近現代の学問的著述は，理解に達するに足る，最小限の字句を用い，刊行年代の明らかな場合にはそれをも附記し，*L'année philologique* による検索を容易ならしめている。例えば，*lux* Sp. 1906, 5 の略記，*Leumann, Gramm. 1977* は，Manu Leumann, *Lateinische Laut- und Formenlehre*, München 1977 を表わしている。

説明文，項目標題などにおいては，以下の如き省略記法が頻繁に使われている（頻度の高いもののみ）。

ad. l.	ad locum
al.	(et) alia (p. 18 参照)
a. 35	anno 35 post Christum natum
a. 35 a. Chr.	anno 35 ante Christum natum
apud ICTos	apud iurisconsultos
cf.	confer, conferas, conferatur, sim.
coll.	collato, -a, -is.
coni.	coniecit, coniectura
e.g. (*ex. gr.*)	exempli gratia
eqs.	et quae sequuntur
gr.	graece
i.	id est
i.q.	idem (est) quod (p. 10 参照)
i. univ.	in universum
om.	omisit, omittitur, omisso, sim.
q.e., *q.s.*	qui, quae, quod est, qui, quae sunt
sim.	(et) similia, similiter
var. l.	varia lectio
vol. VII 2, 1904, 83	Thesauri vol. VII pars altera Sp. 1904, l. 83
in schedis nostris	sc. archivi Thesauri

in exemplari nostro	sc. bibliothecae Thesauri

ロマンス語系諸言語の略記法

cat.		catalanice
dalm.		dalmatice
francog.		francogallice
dialecti:	*argot*	argot quae dicitur
	biturig.	Biturigum (Berry)
	borbon.	Borboniae (Bourbonnais)
	burg.	Burgundiae
	camp.	Campaniae (Champagne)
	comit.	comitatus Burgundionum (Franche-Comté)
	loth.	Lotharingiae
	norm.	Normandiae
	pic.	Picardiae
	pict.	Pictavorum (Poitou)
	wall.	Wallonum
francoprov.		francoprovincialiter (frankoprovenzalisch)
hisp.		hispanice
dialecti:	*arag.*	Aragoniae
	astur.	Asturiae
	legion.	Legionensium (León)
it.		italice
dialecti:	*abrut.*	Abrutii (Abruzzi)
	aemil.	Aemiliae (Emilia-Romagna)
	apul.	Apuliae
	calabr.	Calabriae
	cors.	Corsicae
	langob. (*alp.*)	Langobardiae (alpinae)
	ligur.	Liguriae
	lucan.	Lucaniae
	march.	Marchiae Anconitanae (Marche)

	dialecti:	*neap.*	Neapolis (Napoli-Campania)
		pedem.	Pedemontii (Piemonte)
		rom.	Romae
		sic.	Siciliae
		tusc.	Tusciae (Toscana)
		venet.	Venetorum (Veneto)
		umbr.	Vmbriae
port.			portugallice
prov.			provincialiter (provenzalisch, okzitanisch)
	dialecti:	*alvern.*	Alverniae (Auvergne)
		aquitan.	Aquitaniae celticae (Guyenne)
		delph.	Delphinatus (Dauphiné)
		langued.	Languedociae (Languedoc)
		lemov.	Lemovicum (Limousin)
raet.			raetice
	dialecti:	*centr.*	centralis regionis
		occ.	occidentalis r. (Graubünden)
		or.	orientalis r. (Friuli)
sard.			sarde
	dialecti:	*centr.*	centralis regionis (Logudoro)
		mer.	meridianae r. (Campidano)
		sept.	septentrionalis r. (Gallura)
val.			valachice (rumänisch)
vasc.			vasconice (gaskognisch).

ラエティア方言やサルディニア方言（上記参照）のように，地域的境界線が比較的に推定し易いと思われる場合には，位置の明確な地域を（centr., mer., occ., or., sept.）によって指示してある。その他については，それらの差違を省略して方言の種類に帰属せしめるに止めた。古代（vet.）あるいは中世（med.）に使われていた方言形は，今日使われている形態と区別されなくてはならないだろう。

また，本辞典において著者名のみで言及されている以下の著述をも参考にされたい。

Battisti-Alessio	C. Battisti-G. Alessio, *Dizionario etimologico italiano.* I-V. 1950-1957

Corominas	J. Corominas, *Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana.* I-IV. 1954
Corominas-Pascual	J. Corominas-J. A. Pascual, *Dicc. crítico etim. castellano e hispanico.* I-V. 1980-1983
Faré, Postille	P. A. Faré, *Postille italiane al Roman. Etym. Wörterb.* di W. Meyer-Lübke, 1972
Machado	J. P. Machado, *Dicionario etimologico da lingua portuguesa.* I, II. 1953, 1959. (ed. tertia. I-V. 1977)
M.-L.	W. Meyer-Lübke, *Romanisches Etymologisches Wörterbuch*, ed. tertia. 1935
Wagner	M. L. Wagner, *Dizionario etimologico sardo.* I, II. 1960, 1962
Wartburg	W. von Wartburg, *Französisches Etymologisches Wörterbuch.* 1922 sqq.

本辞典においては，古代から連続的使用によってロマンス語系諸言語に保持されてきた語彙のみ，記述に附されており，それ以外を除いている。また，学術，技術の専門家たちがラテン語を復活させて使っている専門術語の類は含まれていないことを，最後にお断りしておきたい。

印欧語系諸言語略記法（ただし以下は，長年にわたるわれわれの慣習に基づくので，一般的略記法とは多少異同がある。また簡単に諒解される種類の，比較的特殊なものも幾つかは省略されている）：

alban. (*alb.*)	albanice
anglosax. (*anglos.*, *ags.*)	anglosaxonice
aremor.	aremorice (i. bretonice)
armen. (*arm.*)	armeniace
avest. (*av.*, *med.*)	avestice (medice)
boruss. (*pruss. vet.*, *pruthen.*)	borussice
cambr. (*cymr.*)	cambrice
celt.	celtice
corn.	cornvallice
etrusc. (*etr.*)	etrusce
falisc. (*fal.*)	falisce
gall.	gallice

germ. (*german.*)	germanice
got. (*goth.*)	got(h)ice
gr.	graece
hethit.	hethitice
hibern. (*hib.*)	hibernice
ind. (*sanscr.*)	indice
island. (*isl.*)	islandice
lett.	lettice
lituan. (*lithuan.*, *lit.*)	lituanice
med.	*v.* avest.
osc.	osce
paelign. (*pael.*)	paeligne
polon.	polonice
pruss., *pruthen.*	*v.* boruss.
pun.	punice
russ. (*ross.*)	russice
sabin. (*sab.*)	sabine
sanscr.	*v.* ind.
slavon. (*slav.*)	slavonice
theod. (*theodisc.*)	theodisce
tochar. (*toch.*)	tocharice
umbr.	umbrice
vestin.	vestine

あ と が き

日本学士院は1987年に“国際 Thesaurus 委員会”の一員として認められ，毎年 Thesaurus 編纂事業に対して財政的援助を行っております。昨年ミュンヘンの学士院において三年ごとの編集会議が行われ，日本学士院の“Thesaurus 委員会”から村川堅太郎，久保正彰の両名が出席いたしました。その際 Thesaurus 使用上の案内書というべきものをラテン語，ドイツ語，英語，フランス語等で公刊する仕事が進んでいるが，日本語訳も加えて合本にしたいとの申し出がありました。我々両名は日本語版は日本人のためのものであろうから日本で独立に出した方がよかろうと申し出，諒承されました。その公刊の方法については我々両名はいろいろ考慮いたしましたが結局日本学士院の援助によることとなり，できあがったのが本冊子であります。なお，添付されている Thesaurus の“lux”の項目は，原文には含まれていないのでありますが，本文中に頻繁に言及されている部分でありますので，我々の判断によって原寸大に転写いたし，御参考に供することにいたしました。

1989年10月　　日本学士院 Thesaurus 委員会

村　川　堅　太　郎
久　保　正　彰